



Title	ヘイドン・ホワイトの『メタヒストリー 十九世紀ヨーロッパにおける歴史的想像力』における「歴史の詩学 (The Poetics of history)」についての考察
Author(s)	長島, 徹
Citation	北大宗教学年報, 2, 11-25
Issue Date	2019-08-31
DOI	10.14943/90375
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/75428
Type	bulletin (article)
File Information	phil_reli_2-2.pdf



[Instructions for use](#)

【研究ノート】

ヘイドン・ホワイトの『メタヒストリー
十九世紀ヨーロッパにおける歴史的想像力』における
「歴史の詩学 (The Poetics of history)」についての考察

長島 徹

I. はじめに¹

現在、宗教学において、マックス・ミュラー、タイラー、マレット、フレイザーなどが示した、十八、十九世紀の「時代遅れの」宗教史は、それ自体が古典（史料）として扱われており、それらが反映する思想について、またそれらのテキストにおける文学的表現について、分析の対象となっている。これらの関心はつまり、歴史学的な「テキスト」そのものに対する関心ともいえる。

またこうした観点から研究が行われる場合には、その「メタ」的な分析が準拠すべき理論的・方法論的な枠組みについての議論も当然現れてくる。本稿はこうした「メタ」的な分析における研究の方向性を探り、その可能性について検討するための予備的な考察を行うことを目的とする。その題材として、歴史学における「言語論的転回²」の端緒となり、広範な論争を巻き起した、ヘイドン・ホワイト³の『メタヒストリー 十九世紀ヨーロッパにおける歴史的想像力⁴』を取扱う。特にそこにおいて提示された「歴史の詩学 (The Poetics of history)」という図式について考察する。

II. 『メタヒストリー』概要

『メタヒストリー』は序論を含めれば実質 4 部である。その「序論 歴史の詩学 (The Poetics of History)」において、ホワイトは十九世紀の歴史学的テキストを分析するための枠組みを定式化している。

『メタヒストリー』において、歴史学の著作は「散文体の物語的言説という形式をとった言語による構築物 (a verbal structure in the form of narrative prose discourse)」だと定義される。テキストにおける詩的・言語論的性質は「歴史的」説明の必要不可欠の枠組みであり、この認識の枠組みは歴史に関わるあらゆる仕事のなかで「メタヒストリー的」要素として機

能しているとされる。

そしてホワイトは、歴史家がテキストを書く上で「説明効果」を得るためにとっている戦略を「プロット化による説明(explanation by emplotment)」、「形式的論証による説明(explanation by formal argument)」、「イデオロギー的意味による説明(explanation by ideological implication)」、の三つの概念レベルに分けて分析する。そして三つの概念レベルはさらにその中でそれぞれ四つのカテゴリー（「プロット化：ロマンス／悲劇／喜劇／風刺劇」、「形式的論証：形式的／機械論的／有機体論的／コンテクスト主義的」、「イデオロギー的意味：アナキスト／急進／保守／自由主義」）に区分される。ホワイトは上記のように定めた区分に基づいて、歴史的テキストの詩的・言語論的性質について分析を進める。また、ホワイトは歴史家がテキストを書く上での戦略を選ぶときの意識にはさらなる深層レベルが存在しており、それは隠喩、換喩、提喩、アイロニーという四つの喩法 (tropes) の様式によって区分されると主張する。ホワイトによると、こうした喩法の様式による区分はそのまま十九世紀の歴史意識の発展段階の区分としても理解される。そして『メタヒストリー』の序章以降は、十九世紀における歴史意識の発展段階を、先に示した喩法の区分をなぞりながら三段階に分けて論じる。

1部においては、十八世紀の後期啓蒙におけるアイロニカルな歴史理解からの原点回帰が起こり、ヘーゲルの歴史哲学によってアイロニカルなものから隠喩的なものへ橋渡し模索されたことが論じられる。2部は、1830年から1870年のあたりまでの「古典的な」段階において現れた、ミシュレ、ランケ、トクヴィル、ブルクハルトの4人の歴史学の「巨匠」について、それぞれプロット化の様式の区分に沿って論じられる。これらの「巨匠」にとって、歴史叙述において何が「リアリスティック」なのかという基準が、当時のイデオロギー的立場に如何に依存していたのかを、ホワイトは示してみせる。3部は、「歴史主義の危機」に向き合ったマルクス、ニーチェ、クローチェの歴史哲学について論じる。ここでいう「危機」とは、前時代の歴史意識の発展によって達成された複数の「リアリズム」理解についての競合がその「リアリズム」自体の根底を掘り崩してくという事態である。彼らは、リアリズムについての相対主義的懐疑論がはびこる「歴史主義の危機」について論じるが、その反省的なアイロニカルな言説そのものが真の「歴史主義の危機」であった、と指摘される。こうして、十九世紀の歴史意識は、その拒絶から始まった十八世紀の後期啓蒙の歴史理解と同様の、アイロニカルな段階に立ち戻ったとされる。

III. 「歴史の詩学 (The Poetics of History)」：歴史的テキストにおける三つの

概念化のレベルと四つの喩法

次にホワイトの「プロット化による説明」、「形式論的論証による説明」、「イデオロギー的意味による説明」の図式化について詳しく見ていく。

ホワイトは歴史学的著作の理念型的構造を、以下のように区分する。

- ①クロニクル
- ②ストーリー
- ③プロット化の様式
- ④論証の様式
- ⑤イデオロギー的意味の様式

①、②は歴史的説明における「原初的な位相」を指しており、加工されていない歴史的記録から史資料を選択して配列するという過程を表している。クロニクルとは出来事が生じた時間の順番に配列することをいう。そしてクロニクルが事件群の構成要素にまとめられることで、それは明確な発端・中間・結末を持つ時間の流れに沿ったひとつのストーリーに編成される。

「歴史家は、はっきりと分かる始点、中途、終末を備えた理解可能な過程として考案された出来事のまとまり全体が形式的な一貫性をもつことを明らかにし、出来事にストーリーの構成要素としてのさまざまな機能を指定することで、クロニクルのなかの出来事を意味のヒエラルキーへと編成しているのである」。⁵

クロニクルをストーリーへ編成することは「次に何が起こるのか」、「それはどのように起こったのか」、「なぜものごとはあのようにではなく、このように起こったのか」、「事態はどうなるのか」という問を引き起こす。こうした問は歴史家が用いる物語上の戦略を規定している。これらはストーリーのなかの出来事同士の「つながり」が、いったいどのようにもたらされているのかという問である。ここまでがホワイトがいう歴史的説明における「原初的な位相」である。

こうしてストーリーが構成された後で、「すべてはどのような結末になるのか」、「結局要点はどういうことか」などの包括的な問、出来事のまとまり全体の構造に関わる問、自分のストーリーと他者のストーリーとの間の関係について評価をあたえる問が歴史家のなかでより進んだ概念化のレベルにおいて現れくる。この次の段階の問に答えるための戦略とし

て、「プロット化による説明」、「形式論的論証による説明」、「イデオロギーの意味による説明」の三つが現れくるのである。

1) 「プロット化による説明」

プロット化による説明とは「物語られているストーリーの種類を特定することによって、ストーリーに「意味」を与えること⁶⁾」である。ホワイトは『批評の解剖』のなかでノースロップ・フライが打ち出した仮説を引用し、プロット化の様式として「ロマンス(Romance)」、「悲劇(Tragedy)」、「喜劇(Comedy)」、「風刺劇(Satire)」の四つの可能性を想定することができるとしている。

「ロマンス」は「英雄が経験世界を超越し、それに打ち勝ち、最終的にそこから開放者として帰還するという筋書き、つまりキリスト教的な神話学における聖杯伝説やキリストの復活の物語によってもっとも典型的に表現されるような**自己確認**」のドラマと定義される。

「喜劇」のキーワードは勝利と和解である。喜劇においては人間が一時的ではあっても自分の世界に**勝利**するはずだという希望が保持されており、社会的世界や自然的世界のなかで作用する諸力が**和解**しあうときもあるのだ、という期待を孕んでいる。そして喜劇において、社会の状況は対立している諸力の葛藤の結果としてあるのではなく、実はもっと純粋で、もっと理性的で、もっと良いものだとして表現されている。

「悲劇」においては、人間と人間のあいだにはきまって**分裂状態**があるということを示す。しかし、悲劇の最後になって起こる主人公の没落や彼が住まう世界の揺らぎは、対立という試練を耐え抜いたひとびとからは存在そのものを足元から否認してしまうような全面的な脅威とはみなされていない。この分裂状態における争いを眺めている者は、まさしくこのドラマを通じて、人間の実存を支配する**法則**がそこに顕現したとついに理解することができる。世界に対する主人公の努力がこの認識を達成したのであるから、悲劇のプロセスは(観客に対して)ある積極的な契機を残したことになる。悲劇は、世界のなかで平和で健やかな生を送ろうとするときに人間は何を望んでいるのか、**何を求めているのかに関する限界を定めている**。

「風刺劇」は、ロマンス、喜劇、悲劇で示されるような救いのドラマなど存在しない、ということを示すドラマである。そこでは、人間は究極的には世界の支配者であるどころか、**むしろその虜なのだ**という理解がなされている。死という力は人間の意識や意思では本当に克服することなどできはしないと認める**諦念**が、一貫して示されている。そしてロマンスや喜劇や悲劇においてドラマティックに展開されている世界解釈は究極的には不十分なものにすぎないということが示される。「そのことで風刺劇は、世界に関するあらゆるソフィス

ティケイトされた理解を拒否する意識に道を拓くことになり、世界とその過程を神話的に理解するような最初の原初的な精神への回帰を、まるで一つの円環をなしてもとに戻ったかのように予示してもいる」。⁸

2) 「論証による説明」

「論証による説明」とは、歴史家が最終的に「全体の意味」とか「その目的」とかを説明しようとするための前提となるような、もう一つ抽象度の上がった概念化のレベルである。それは、ある状態が他の状態へと**普遍的な因果法則**によって導かれる展開過程として、物語の形式によって**言語的説明モデルを提示する**、ということである。

しかし、ホワイトの見方によれば、歴史学においてはどのような様式の言語的説明モデルを提示するかについて、いまだに概念的混乱状態にあると言える。

「自然科学における進歩は、そのときどきに確立している科学者共同体の成員が、何を科学的問題と見なし、科学的説明とはどういう形式をとるべきであり、どんな性質のデータを本来的な意味で科学的な現実解釈の証明手段として認めるかについて、達成した合意を基礎にもっているように見える。それに対して歴史家のあいだにはそうした合意は存在していないし、かつて存在したこともなかった」。⁹

自然科学者とは異なり、証明のための共通の言語的説明モデルが存在しないということは、歴史的説明がさまざまな「メタ」ヒストリー的な前提に依拠せざるをえない、ということの意味している。歴史学はいまだに、自然科学が十六世紀に体験していたような概念的混乱状態にとどまっている、といえるのである。

ホワイトによれば、こうした論証モデルの相違というのは、歴史家の専門的な知識の深さや正確性を問われる専門誌上の書評欄に現れてくるような論争について述べているのではなく、例えば「産業革命が起こった原因は何か」「ルネッサンスの真の本性とは何か」というような問題に対して、同程度の技量をもつ優れた複数の歴史家から異なったいくつもの「解釈」が提示されるような事態のことを指しているとされる。

ホワイトはこのように歴史学において異なったいくつもの歴史的説明のために採用できる論証のモデルを、**スティーブン・C・ペッパー**の『世界仮説』のなかで行われている分析にならって整理している。それらは、「形式論 (Formist)」、「有機体論 (Organicist)」、「機械論 (Mechanistic)」、「コンテクスト主義 (Contextualist)」の四つに分類することができるとされる。

「形式論的説明」による歴史家は、**歴史の場にある特殊な固有性を明確にし**、その場が表している現象類型の多様性を捉える。具体的にはヘルダー、カーライル、ミシュレのようなロマン主義的な歴史家、ニーブール、モムゼン、トレヴェリアンのような偉大な歴史的人物の作者が挙げられる。形式論による論証では歴史の場の多様性、色調、躍動感がうまく描かれているかどうか、重要な指標となる。また形式論的説明は分析的な操作において、「**拡散的**」な傾向をもつ。形式論は、あまりにも一般化された議論を組み立てており概念の「**厳密さ**」を欠く、と指摘されることがある。

「有機体論的説明」による歴史家は拡散的な一連の出来事のなかから、**ひとまとまりの統合された存在**、例えば「民族」「国民」「文化」のようなものが、凝集し結晶化するかのよう
に描く。また、この有機体論的な様式で描かれている歴史は、終局ないし目的という歴史過程の帰着点を重視する傾向があり、歴史に浮かび上がるあらゆる過程は、その帰着点を志向して運動すると想定される。そして個々の出来事や、それが全体としてまとめて捉えられたときのあらゆる過程に浸透している「**原理**」と「**観念**」について論じたがる傾向がある。また有機体論的説明は、分析的な操作においては「**統合的**」な傾向をもつ。具体的にはジュベル、モムゼン、トライチュケ、スタブス、メイトランドなどの十九世紀半ばの「**国民主義的**」歴史家の大半、歴史哲学においてはヘーゲルのような観念論者が挙げられる。一方で有機体論は抽象論に陥りがちであると批判されることもある。

「機械論的な説明理論」は、歴史の場のなかで発見された過程がどういう結果にいたるのかを決定する**因果法則**を探し出すことに腐心している。機械論者は「その作用を現実に支配する法則を言い当てるために歴史を研究しており、そうした法則の効果を物語の形式で表現するために歴史を書いている」。¹⁰機械論は、資料分析的な操作においては、「**還元的**」な傾向をもつ。具体的な歴史家としてはバックル、テーヌ、マルクス、トクヴィルなどが挙げられる。機械論は有機体論と同じように抽象論に陥る危険があると指摘される。一方、形式論と比べれば「何が起きているのか」を表現する際に説得力のある議論を展開するが、それは(形式論などの個々の実在の特殊な固有性を重視する立場からすれば)個々の実在を軽視しているとみなされることもありうる。とされる。

「コンテキスト主義的」な説明理論は、「一定の時点に一定の場所を占めている行為者や作用主体のなかにどんな機能的な相関関係があるのかを特定することによって、歴史の場で「**起こったこと**」が説明可能になるはずだ、と主張する」。¹¹コンテキスト主義者は、時代や時期の「**潮流**」という観点で、歴史的出来事の特定の領域で確認できるような、諸現象の相互に関係しあう一体性を探求する。コンテキスト主義は、分析的な操作においては、形式論の「**拡散的**」傾向と有機体論の「**統合的**」傾向という、二つの衝動がむすびついたものと

いえる。具体的な歴史家としてはヘロドトス、ホイジンガ、ヤーコブ・ブルクハルトが挙げられる。コンテキスト主義による説明は、歴史の場を有意味な出来事のさまざまな領域に編成し、それに基づいて時代を区別しなくてはいけないときに、歴史の場において際立たせるべき過程の物語のモデルをどう構築すべきなのかという問題に対してあいまいな解決案しか示さない、と批判されることがある。一方で、過程のなかの断片や一部を共時的なものとして表象することができる。とされる。

以上のように、十九世紀の歴史学においては四つの言語的説明モデルが示されたが、実際のところ、アカデミックな歴史学者たちのあいだでは形式論とコンテキスト主義が優勢であり、これがオーソドックスな理解として受け入れられてきたとホワイトは主張する。職業的歴史学者にとって、個性記述論とコンテキスト主義は特有な意味で「歴史学的な」性格をもつ説明ならきまってそれを選ばざるを得ない戦略だと受け止められており、それとは逆に、機械論や有機体論は異端として考えられてきた。

このように考えられてきたのは、歴史学の発展において歴史は有機体論や機械論を手続きから排除することによってのみ神話や宗教、形而上学から解放されると信じられてきたためである。さらにいえば歴史家自身が形式論やコンテキスト主義に自分を限定することによって、「経験的なもの」のなかにとどまり、やっかいな「歴史哲学」にはまりこんでしまうことを回避することができると考えられていたのである。しかし歴史学において、論証様式の選好についての根拠は、認識論のレベルで存在しないとホワイトは主張する。

「しかし、歴史学はそもそも厳密な学ではないのだからこそ、たとえ有機体論や機械論を排除したとしても、それだけでは自動的に科学性が高まるなどということはない」。¹²

「つまり、個性記述論やコンテキスト主義という拡散的な志向性をもったテクニックだけをよしとする姿勢は、歴史家の側で無自覚にただそういう決断が行われているという事実が反映されているにすぎない。それはつまり、有機体論や機械論の立場から歴史過程を考えた場合にそうなるようには、経験的な所与の史資料を普遍的概念にまとめ上げたりはしない、という決断である。他方、そのような決断自体も、人間や社会に関する学がとらなくてはならない形式についての、没批判的で素朴な思い込みから由来したものであるように見える。またそうした素朴な思い込みも、それはそれでその本性において、一般に倫理的なものであり、特殊な場合にはイデオロギー的なものであると見えるだろう」。¹³

3) 「イデオロギー的意味による説明」

ホワイトは事実を歴史的に評価する場合にはつねに、それ以上還元できないようなイデオロギー的な構成要素がそこに現れてくると明確に主張する。自然科学者とは異なり、論証のための共通の言語的説明モデルが存在しない以上、論証の様式の選好についての根拠は認識論のレベルでは存在しない。ホワイトは、歴史は科学ではなく、あるいはよくても歴史は、はっきりと特定できる非科学的構成要素を内在した科学以前の層に根を下ろした存在である、とまで述べている。

「歴史叙述や歴史哲学において、自分は社会的意識や実践の場である現在から過去を区別したという主張や、過去の世界の形式的一貫性を、自分のいる世界とは関係なく客観的に特定した、という主張は、現在が過去からの連続であるかぎり、過去の世界のみならず現在の世界の知がどういう形式をとるべきなのかということについて、一定の選択的な概念理解を含みもっている。すなわち、問題は過去の解釈だけではなく、現在をどうするのかというイデオロギー的問題にそのまま結びついているのである」。¹⁴

ここでホワイトのいうイデオロギーとは、現在の世界のなかで一定の立場をとり、またそれに働きかけるように命じる社会的規則や命令規範の束を意味する。イデオロギーは「これが科学、リアリズムだ」と主張する権威を根拠づける論拠として機能する。ホワイトは**カール・マンハイム**が『イデオロギーとユートピア』で行った分析を引用して、基本的なイデオロギー的立場として、「アナーキズム (Anarchism)」、「保守派 (Conservatism)」、「急進派 (Radicalism)」、「自由主義 (Liberalism)」という四つの可能性を立てておくことができると主張する。

注意すべきはこれらが一般的なイデオロギー的選好傾向を表す指標であって、特定の社会的党派を指すレッテルではないということである。人間科学が教える教訓についてのさまざまな概念内容であり、社会的現状を維持したほうがいいのか変革したほうがいいのか、その変革の方向性、変革の手段についての理解を示すものである。そして社会変革という問題に関しては、四つの立場はどれもその不可避性は承認しているが、その変革が望ましいものであるのかどうか、どういった変革のペースが一番ふさわしいのかについて、違った立場をとっている。

「アナーキズム」は、社会の構造的な変革は不可避であるとし、「社会」を廃棄し「共同体」を打ち立てることを目指す。その変革は激しく崩れ落ちるような崩壊としてイメージされる。また、遠い過去をユートピア視する、過去志向型である。歴史的叙述においては直観

に頼り、本質的に感情移入に基礎をおくロマン主義的な技法を用いる。

「保守主義」は、社会は本来的に健康なものであるとし、革命について懐疑的である。保守派は社会変革を植物が成長するような漸進的な過程から類推する。また現在ある状態が最善とする、現在志向型である。歴史的叙述において有機体論的な説明を用いる。

「自由主義」は、社会は本来的に健康なものであるとし、革命について楽観的である。社会変革を、機械を調整したり適切な「チューニング」を行ったりすることから類推する。また遠い未来をユートピア視する、遠い未来志向型である。歴史的叙述においては、歴史の発展のなかにある一般的な傾向とか主要な流れを主軸として論じる。

「急進派」は、構造的な変革は不可避だとし、「社会」を新しい基礎の上に再構築することを目指す。その変革は激しく崩れ落ちるような崩壊としてイメージされる。また変革が差し迫っている、ユートピアの到来する条件が差し迫っている、という近未来志向型である。歴史的叙述においては、歴史の法則性を主軸に論じる。

ホワイトは、こうした互いに対立しあう理解の齟齬の原因は歴史家の**倫理的考察**のなかにあると指摘する。ある特定の認識論的な立場を選択し、しかじかの認識が適切だと判断することは、それ自体が認識の問題にとどまらない歴史家自身の**倫理的な選択**であるため、こうした異なるイデオロギーの外部に立ち、この対立を調停できるような根拠などは存在しない。また、ホワイトはある特定のイデオロギーがよしとする歴史的知の理解が他の理解よりもいっそう「事実に即している」と主張することもできない、とも述べる。なぜなら、ここではその異なったイデオロギー同士は、それぞれの歴史的認識を「リアリズム」だと考えており、その際に掲げる適正な基準の中身そのものが争点になっているからである。またそもそも何らかのイデオロギー的先行判断をそこに持ち込むことなしには、歴史的認識をめぐり考え方が、別の立場のそれよりもいっそう「科学的である」と主張することもできないと考えられる。歴史学の作品のなかにある倫理的な契機は、イデオロギー的な意味の様式に反映されている。このイデオロギー的な意味の様式によって、美的に捉えること(プロット化)と認識上の操作(論証)とが結合され、その結果、歴史の純粹に記述的ないし分析的に見えるかもしれない言明から、何々をなすべきだとか、なすべきではないという規範的言明が導き出される。

こうしたさまざまな構成のレベルにおける説明効果を得るために用いることができる多様な様式のあいだには、以下の図のような選択的親和性が存在する。

〈プロット化の様式〉	〈論証の様式〉	〈イデオロギー的意味の様式〉
ロマンティック	形式的	アナーキスト
悲劇的	機械論的	急進的
喜劇的	有機体論的	保守的
風刺劇的	コンテキスト主義的	自由主義

そしてこうした選択的親和性は、プロット化と論証とイデオロギー的意味がそれぞれにとる様式のなかに見てとることができる構造的同型性に基礎をもっている。

ホワイトは、このような整合性や一貫性は、つまり詩的なものであり、言語の存在そのものに根ざした本性をもっているため生まれる、と主張するのである。

「歴史的説明は、歴史的過程の個々の断片の、言語によって表現されたモデルやアイコンであると思われる。しかし、そうしてモデルが必要なのは、文書資料のなかで記録が、そこで検証される出来事の構造のはっきりとしたイメージをありありと描き出すことはないからである。したがって、歴史家は過去において「事実として起こったこと」を具体的に形象化するために、文書資料のなかで記録されている出来事のまとまり全体を、認識のありうる対象としてあらかじめ形象化しなくてはならない。この**先行形象化という行為**は、歴史家自身の意識の秩序においては、認識の位相に先立ち、批判に先立つものであるから、まさに詩的なのである」。¹⁵

4) 「四つの喩法」

喩法を手がかりにすることで、(歴史的過程の) 客体がどのように分節化されているのかという「先行形象化」の問題をはっきりさせることができる。

「伝統的な詩学も、現代の言語理論も、詩的な言語を分析するために、言い換えれば、形象を創出する言語を分析するためには、基本となる四つの喩法があると考えている。それが、**隠喩、換喩、提喩、アイロニー**である」。¹⁶

「**隠喩**」とは、**類比や比較**という方法によって特徴づけられる喩法である。隠喩は本質的に代理表象するものであり、先に示した形式論という様式に対応する。隠喩は経験的世界を「**対象—対象**」という観点で先行的に形象化する。

「**換喩**」とは、あるものの部分でもって、全体を表すという喩法である。換喩は本質的に

還元主義的なものであり、先に示した機械論という様式に対応する。換喩は経験的世界を、それなしには機能することができないようなそれ自身のある一部と、等置される部分一部分の関係性という観点で先行的に形象化する。

「提喩」とは、「(これを換喩の一形式と見る理論家もいるが) 全体的なものに内在すると考えられる一定の性質を部分が象徴することで、ある現象を記述する」¹⁷喩法である。提喩は本質的に統合的なものであり、先に示した有機体論という様式に対応する。提喩は経験的世界を(分有された実質の内在的な関係というあり方、全体のマクロコスモスは部分の総和とは質的に異なり、諸部分はそのマイクロコスモスに過ぎない、という)、客体—全体の関係性という観点で先行的に形象化する。

「アイロニー」は、文字通りのレベルでは肯定的な言明と見えることを、形象的なレベルで否定する(またはその逆の)喩法である。アイロニーは否定表現的であり、メタ喩法的なものである。既にそれが「リアリスティック」だとされる支配的な形象化の様式が存在するときに、それに対する否定、反省として現れる。そのため、アイロニー的な表現が、本質的に洗練されたリアリスティックなものとなみなされることがある。

5) 「十九世紀の歴史意識の諸段階」

そしてホワイトは、この四つの喩法による区分が十九世紀ヨーロッパの歴史意識の発展段階を区分する上でも有効だと主張する。

「喩法理論は、十九世紀ヨーロッパに出現した歴史的な思考の支配的な様式がもつ特性を明確にする方法を提供してくれる。これは詩的言語についての一般理論の基礎を提示するから、四つの段階の最後がぐるりと一巡して最初に再接合するという、閉じた循環的展開をなす歴史的想像力の深層構造を明確にすることもできる。どの様式もこの循環的展開の、つまり歴史的世界を隠喩的に理解することから始まって、換喩的な理解や提喩的理解に進み、さらにあらゆる知をそれ以上還元できないような相対主義として捉えるアイロニー的な理解へと展開する言説の伝承プロセスのなかにおける、一段落や一契機として理解することができるのである」。¹⁸

十九世紀の歴史意識の最初の段階は、後期啓蒙の歴史的思考、ヴォルテール、ギボン、ヒューム、カント、ロバートソンに代表されるように、本質的にアイロニーの観点で歴史を眺めるようになっていた。そうした後期啓蒙の理性に基づくアイロニカルな歴史理解に反発した前ロマン派の思想家たち、ルソー、ユストゥス・メーザー、エドマンド・バーク、ヘル

ダーらは、素朴とも見えるような感情移入にもとづく歴史理解を打ち出した。また、ヘーゲルはアイロニー的理解と隠喩的理解との差異について奥行きのある定式的表現を与えた。さらに彼自身は歴史を提喩的に理解する歴史哲学を構想した。同時代のフランスでは、啓蒙の合理主義が実証主義者たちの手で有機体論的な方向に修正された。このように十九世紀の三分の一の歴史的理解は「ロマン派」「観念論」「実証主義」との三つの潮流からなっているが、いずれも後期啓蒙の合理主義者が過去の研究を行う場合に見せたアイロニカルな態度から決別するという点では、歩みをともにしていた。

それに続く1830年から1870年のあたりまでの成熟した第二の時代では、歴史意識についての「古典的な」段階における特徴的な論説が現れた。それはミシュレ、ランケ、トクヴィル、ブルクハルトなどの「巨匠」がその主要な著作を書き上げていた時代である。そこでは歴史叙述において何が「リアリスティック」なのかという問題が明確に意識されていた。十九世紀における歴史的思考の第三の時代は、第二段階での歴史家たちの成功そのものが、歴史意識を「歴史主義の危機」の本当の内実であるアイロニーという条件に投げ込んでしまう過程である。複数の互いに排他的な、歴史についての「客観性」「科学性」「リアリズム」の概念が並存する状況が、それ自体に対する信頼を掘り崩すことになった。

このようにホワイトは十九世紀の歴史意識の発展を、「アイロニカル→隠喩的→換喩的・提喩的→アイロニカル」という、螺旋的な循環的構造として描き出している。

IV. 今後の課題

以上、ホワイトの『メタヒストリー』における「歴史の詩学」の図式を参照してきた。最後に本稿を受けた今後の課題について整理すると大きく二つの論点に集約できる。まず、ホワイト自身の分析の根拠についてである。「プロット化による説明」ではノースロップ・フライ、「形式的論証による説明」ではスティーブン・C・ペッパー、「イデオロギー的意味による説明」ではカール・マンハイムをそれぞれ引用しているが、それらの議論を援用して行くことについての妥当性について、それほど突き詰めた議論は展開されていない。また、歴史学の科学性について、「認識論のレベルで根拠は存在しない」とするホワイト自身が、どのような認識論的な立場（あるいはイデオロギー的な立場）にたってメタヒストリーの分析を行っているか、明確にはされていない。そこで、ホワイトの立場に対するメタ的分析という課題が出てくるだろう。しかしこのような問さえも、メタ的な問の無限後退に陥る可能性がある。

そこで、第二の論点としてホワイトの図式の応用可能性ということが現れてくる。ホワイトの議論の妥当性については、(哲学的な認識論の土俵において考えるよりも) 個々の研究

課題に応じて参照されることによりその妥当性が検証されるのではないだろうか。ホワイト自身も述べているように、歴史学において認識論のレベルでの絶対的な根拠が存在しないのであれば、ホワイトの「歴史の詩学」が個々の歴史学的著述の上で戦略的にどれほど「有用」であるか考察してみることである。そのような取り組みは、ホワイトが提示した「歴史学的に考えるとはいったいどういうことか」という問に対する、意義ある解答の一つとなるだろう。

参考文献

- ・ Hayden White, 1973/2014, “Metahistory: The Historical Imagination in Nineteenth-century Europe, Fortieth-Anniversary Edition” Baltimore, Johns Hopkins University. (岩崎稔監訳 2017『メタヒストリー—十九世紀ヨーロッパにおける歴史的想像力』 作品社)
- ・ Hayden White, 2014, “The Practical Past” Evanston: Northwestern University Press. (上村忠男監訳 2017『実用的な過去』 岩波書店)
- ・ ヘイドン・ホワイト 上村忠男編訳 2017『歴史の喩法 ホワイト主要論文集成』 作品社 (収録論文: “The Burden of History” 1966 『歴史という重荷』、“The Historical Text as Literary Artifact” 1974 『文学的製作物としての歴史的テキスト』、“The Value of Narrativity in the Representation of Reality” 1980 『現実を表象するにあたっての物語性の価値』 “The Politics of Historical Interpretation: Discipline and De-Sublimation” 1982 『歴史的解釈の政治—ディシプリンと脱崇高化』、“Historical Emplotment and the Problem of Truth” 1992 『歴史のプロット化と歴史的表象における真実の問題』、“Auerbach’s Literary History: Figural Causation and Modernist Historicism” 1996 『アウエルバッハの文学史—比喩的因果関係とモダニズム的歴史主義』)
- ・ カルロ・キンズブルク 上村忠男訳 2003『歴史を逆なでに読む』 みすず書房
- ・ 『思想 2010 年第 8 号 ヘイドン・ホワイトの問題と歴史学』 岩波書店
- ・ 長谷川貴彦 2016 『現代歴史学への展望 言語論的転回を超えて』 岩波書店

¹ 本稿は平成平成 30 年度第 4 回北海道大学宗教学研究會 (平成 31 年 2 月 18 日) に行われた筆者の研究発表の資料に加筆修正を加えたものである。

² カントの「物自体」のようにわれわれは過去そのものを知りうることはできず、われわれが知りうる過去とは、テキストに書かれた言語というア・プリオリな形式によって「構成」されたものである、という歴史学における認識上の転回、ないしこれを主張する立場。(こうした思考を突き詰めれば歴史的実在というものは存在せずまたは科学的に実証することはできず、歴史とは書かれたテキストの数だけ存在するという相対主義的懐疑論に陥る。) しかしホワイト自

身は上記のような意味での「言語論的転回」を『メタヒストリー』上で主張してはならず、以後も行ったことはない。

³ Hayden White (1928-2018) アメリカの歴史家・批評家。1955年ミシガン大学において「グレゴリウス七世からクレルヴォーの聖ベルナルにいたるまでの教皇権理想をめぐる抗争—とくに1130年の教会分裂について (The Conflict of Papal Leadership Ideals from Gregory VII to St. Bernard de Clairvaux with Special Reference to the Papal Schism of 1130)」により博士号取得。1973年『メタヒストリー』出版。歴史学における「言語論的転回」の端緒となったテキストとして論争を巻き起こす。

⁴ 日本においては『メタヒストリー』は発表当時、ほとんど顧みられることがなかった。1980年代末『思想』や『現代思想』誌において、ホワイトの議論が部分的に紹介される。2009年10月に来日し、東洋大学と立命館大学でセミナーと講義を行う。それに伴って『思想』誌の2010年第8号において『ヘイドン・ホワイト的問題と歴史学』という特集が組まれる。そこで、主著の『メタヒストリー』の翻訳の出版が予告がされていたが、さらにそこから7年経った2017年に刊行されることになった。2017年には上村忠男訳によるホワイトの論文集である『歴史の喩法—ホワイト主要論文集』、『実用的な過去』が発表される。日本では、主著『メタヒストリー』の翻訳が43年近くされなかったこともありその議論についての紹介が遅れている。

またホワイトの最大の論敵であるカルロ・ギンズブルクのホワイト批判が先行して紹介されていたこともあり、ホワイトはフィクションと歴史の境界を破壊する相対主義的懐疑論者であるとのレッテルを貼られることもある。ホワイトの議論が僅かではあるが認識され始めた90年代以降は、「従軍慰安婦問題」「歴史教科書をつくる会」などの歴史修正主義が現れた時代と重なり、そうした修正主義的な運動に抵抗する理論的な根拠を示すどころかそれらを擁護するものではないか、とみなされたこともホワイトの議論に対する警戒や抵抗を生み出しているといえる(『思想 2010年第8号—ヘイドン・ホワイト的問題と歴史学』岩波書店)。

⁵ Hayden White, 1973/2014, “Metahistory: The Historical Imagination in Nineteenth-century Europe, Fortieth-Anniversary Edition” Baltimore, Johns Hopkins University. p6 (岩崎稔監訳 2017『メタヒストリー—十九世紀ヨーロッパにおける歴史的想像力』作品社 p56)

⁶ 同上 p7 岩崎 p58

⁷ 同上 p8 岩崎 p60

⁸ 同上 p10 岩崎 p62

⁹ 同上 p12 岩崎 p65

¹⁰ 同上 p16 岩崎 p73

- ¹¹ 同上 p17 岩崎 p74
¹² 同上 p20 岩崎 p78
¹³ 同上 p20 岩崎 p78
¹⁴ 同上 p21 岩崎 p80
¹⁵ 同上 p30 岩崎 p93
¹⁶ 同上 p30 岩崎 p94
¹⁷ 同上 p30 岩崎 p94
¹⁸ 同上 p37 岩崎 p104